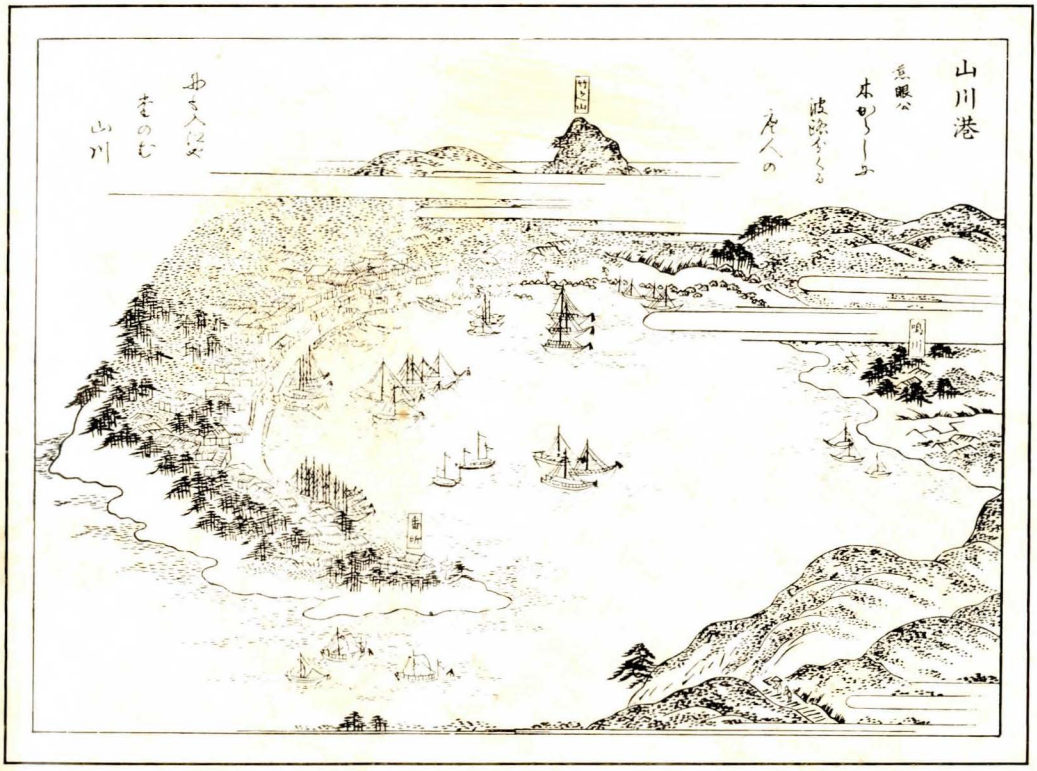
山川の文化財

第５集　年表「山川の水産史」



鹿児島県揖宿郡山川町教育委員会

目　　次

発刊にあたって …… 1

年表「山川の水産史」 …… 2

編　集　後　記 …… 9

「題字は東　栄寿　山川町前助役」

発刊にあたって

文化財は，祖先のたくましい創造力，たゆまざる努力によって生み育てられた貴重な財産であります。

私たちは，これらの文化財を損傷したり破壊することなく，完全な姿で，次の世代に伝えてゆく責務を負っています。

私たちの山川町では，文化財保護条例が昭和47年に制定されるとともに，文化財保護審議会が発足し，精力的に文化財の調査研究と活用が図られているところです。

その成果の一端を広く町民に知っていただくために，本冊子を発刊いたしました。関係者の方々が，これによって文化財を愛する気持ちを改めて確認していただければ幸いです。

昭和５９年２月１８日

山川町教育委員会

教育長　久　保　市　夫

山川の水産史

洪積世末期 (約５万年前)	山川港火山爆発。のち東側に砂州が発達、天然の良港となる。
中世以降	海上交通の中枢の港で貿易の要津として栄える。
藩政時代	町浜・岡児ヶ水・浜児ヶ水の三浦で漁業が営まれる。 岡児ヶ水浦が漁村としては先駆で、神瀬・松ヶ瀬に築瀬し、うるめ・むろ昼張網が十統以上、夜焚八田網も操業した。
１８６２年頃 (文久年間)	山川角ヶ瀬で、ブリ飼付漁業が創業される。 (明治末期、大迫幸内氏外20名により再興大正12年まで継続された。)
１８６５年頃 (慶応年間)	岡児ヶ水梶ヶ瀬で、ブリ飼付漁業に着業。 (明治36年頃は、宮田十一氏外22名の免許。大正９年に岡児ヶ水漁業組合に譲渡され、昭和８年まで操業。)
１８７２年 (明治５年)	町浜、野口氏。谷山・喜入からイワシ八反網の技術導入。 当時の漁獲物は、町浜では魚仲買によりサバ節・うるめ節に加工岡浜では谷山仲買に沖売り、または自家で煮干に加工して売却した。
１８８２年 (明治14年)	三軒問屋（松永・藤崎・海江田の三氏）が慣行魚市場開設。 鮮魚を集荷。 当時、仲買は山元・黒岩・松山・田原・原口氏など10軒足らずで煮干、雑節など自家製造した。
１８８７年 (明治20年)	岡浜で、きびなご刺網30隻を数える。 カツオ釣りに五反帆船九隻が出現。15名位が乗組み、七島灘まで出漁した。 船主は、岡浜の東吉之丞・浜田倉兵衛・木下喜作・浜田仁右エ門前田仁助・西村庄吉・中村七太郎・川上利助・井手上茂兵衛の各氏である。 漁獲は親方の納屋で荒節に製造、川尻・枕崎の仲買に売却した。

１８９４年 (明治27～8年)	五反帆のカツオ釣船は、先進地坊・枕崎の船と対抗できず沿岸漁撈用に後退。代って七反帆船４隻が登場。岡浜の東吉之丞・西村庄吉・川上利吉・宮田庄八の各氏である。 七反帆船は、１航海７日間まで可能となり、漁獲されたカツオは、屋久・永良部島の納屋に煮熟を委託、帰港してから節に製造した。釣餌のキビナゴは樽に生かして沖へ出た。樽の海水は、昼夜の別なく汲み替えられた。この作業中にうたわれたのが「汐替節」である。
１９０５年 (明治38年)	台風による「七島遭難」が突発。岡児ヶ水の七反帆船２隻が遭難、44名の生命を失う。
１９０６年 (明治39年)	県水産試験場、山川港で、かつお餌の生簀の試験を行う。
１９０７年 (明治40年)	山川漁業組合設立。
１９０８年 (明治41年)	山川海産組合を設立、生簀業の充実を図る。 サンゴ採取はじまる。五島・伊予・土佐船に山川船３隻が加わり、山川を根拠港に約 400隻が佐多岬・竹島・種子島の漁場でサンゴを採取。サンゴ加工で賑う。（６年間）
１９０９年 (明治42年)	岡児ヶ水に、地元約20名の株仲間により動力カツオ漁船「徳光丸」が進水。徳光丸は着業１年足らずで失敗，転売された。再び、和船沿岸カツオ釣りに逆行。農業主業化の傾向とともに、岡浜におけるカツオ漁業は消滅する。 **山川初の動力かつお漁船「徳　光　丸」** 明治40年頃からカツオ漁船の動力化が進む。山川では、岡児ヶ水で約20名の株仲間を結成し、明治42年10月、初の動力カツオ漁船「徳光丸」を進水した。主な株持ちは、中村七太郎、中村長助、浜田宅右エ門、井上茂平次、宮田作蔵、前田辰次郎、前村善太郎、宮田伴蔵、山元影義、川上八太郎、林伊勢太郎、宮田源太郎、宮田覚市、宮田覚二、井上六太郎、春平助氏等である。 乗組みは、水先案内の枕崎出身者のほかはかっての帆船カツオ釣りの経験者で、節製造には別に日雇いを用いた。 活餌は桜島・牛之浜で積み、一航海３～７日、めくら曽根を主漁場とした。 徳光丸は、船体が小型で、餌が長く活かされない、主要漁場までの航続が困難、機関取扱いの不馴れで故障多発、水揚げが少い、資本の不漁時への耐久力が弱かったなどの悪条件が重なり、操業１年足らずで売却の運命をたどった。 船型　日本型　船体　長57尺　巾11尺　10トン　造船所　宮崎県東臼杵郡尾末 機関　25馬力(1時間1馬力　消費石油3合)　建造費　3,550円(現在推定5,073千円) 速力　6.5海里

明治後期	漁船の動力化がすすむと共に、奄美大島周辺が主要漁場となり、山川港は、県外船の基地として餌料供給地として台頭。かつお節製造も始まる。 藤坂三次郎氏は沿岸漁業の出身でありながら、明治37、8年には壱岐、対島のさば・いか、昭和初年には北海道、千島のまぐろ、さらに台湾まぐろなど遠方出漁の先覚者である。　直接山川港に関係ある事柄としては、明治40年佐多岬沖から竹島種子島にわたってサンゴ漁場を発見している。五島、伊予、土佐及び県内各地からの採取船400隻が山川を根拠地として約6ヶ年操業し、これに地元船で参加したのは、3隻にすぎなかったが、村内に大きな繁栄をもたらした。また大正初年桜島より移住した折田氏7、8戸は追込網に似たかつら網や潜水突魚法をもって活躍し、山川漁家に刺激をあたえた。
1909年 (明治42年)	伊予のかつお節製造業者が、山元新之助氏の納屋を借り、土佐節を製造。
1910年 (明治43年)	七山元新之助氏、かつお節の製法を習得し自家製造。新之助氏28才。 (大正2年、浜崎・戸田氏。大正5年原口・松山・田原氏など創業。以後漸増す。)
1913年 (大正2年)	県が高知から鰹節の技術者を招へい。黒岩氏の工場で女子削り工を養成。
1915年 (大正4年)	かつお漁船、自然換水方式の活餌槽開発。餌もキビナゴからカタクチイワシへ変わる。
1917年 (大正6年)	甲種魚市場認可。
1919年 (大正8年)	薩摩水産株式会社、市場をつくる。(昭和4年、解散)
1922年 (大正11年)	山川製氷株式会社を設立、氷の供給はじめる。
1923年 (大正12年)	番所鼻陥没。
1928年 (昭和3年)	県水産試験場、山川に鰹節伝習所を開設。主に従来の土佐型から改良型(静岡型)を伝授した。(18年まで)

１９３０年 （昭和５年）	谷山宗太郎氏、かつお漁業に着業。福伝丸（15トン）。この成功に刺激され、地元のかつお漁業への熱が高まる。 山川節類製造組合設立（20年自然消滅）
１９３２年 （昭和７年）	岩切鉄工場開業。その後、小規模であるが内燃機関製作修理工場が漸増。
１９３４年 （昭和９年）	第一次築港はじまる。（10年に完成） 第一回山川みなと祭り挙行。
１９３５年 （昭和10年）	網代浜に江口造船所、成川に篠原造船所が開設、洋式木造漁船の建造修理を行う。
１９３７年 （昭和12年）	鵜瀬灯標が完成
１９３８年 （昭和13年）	山川漁業組合が保証責任漁業協同組合となり共販・信用事業などの充実を図る。
１９４０年 （昭和15年）	土佐鰹節製造組合設立（20年自然消滅）
１９４１年 （昭和16年）	太平洋戦争ぼっ発。カツオに公定価格がきめられ（貫当り１円74銭）配給制になる。
１９４４年 （昭和19年）	漁業協同組合を漁業会に改称。 大戦激化、漁船は徴用される。 カツオ漁獲皆無となり県外業者引きあげる。
１９４５年 （昭和20年）	山川戦災大火 第２次世界大戦終戦。
１９４６年 （昭和21年）	イタヤ貝、大量に水揚げ。 税関山川監視署、開設される。 第２次築港はじまる。（25年完成）

１９４８年 (昭和23年)	食糧増産のため復興金融措置により漁船が復旧。外来漁船も逐次増加。 かつお節製造業も漸増する。 町立授産所を設置。かつお節製造技術者の養成をはじめる (昭和43年まで、修了者450名)
１９４９年 (昭和24年)	漁業会を漁業協同組合に改組。 沖縄向け裸大節の生産はじまる。
１９５０年 (昭和25年)	カツオの統制撤廃、入札制が復活する。 山川のかつお漁船、９隻（平均71.2トン） 山川水産加工業協同組合設立される。 (42年、水協法に基き、さつま鰹節水産加工協同組合に改組)
１９５１年 (昭和26年)	海上保安庁山川警備救難所開設さる。（30年、海上保安署） ルース台風来襲。
１９５２年 (昭和27年)	山川漁港第３種漁港に指定さる。 白貝、大量に水揚げ。〈36年まで)
１９５３年 (昭和28年)	後浜護岸の復旧なる。
１９５４年 (昭和29年)	成川浜埋立工事に着手。（32年完成)
１９５５年 (昭和30年)	かつお煮釜用重油バーナー、ホイスト等が普及。
１９５７年 (昭和32年)	外来加工業者が山川鰹節類加工協同組合設立。 (41年、水協法に基く協組に改組)
１９５８年 (昭和33年)	成川石炭庫跡埋立完成。 山川のかつお漁船、16隻（平均 105トン） 生利節共同出荷組合を発展解散し、山川水産物商工業協同組合を設立。魚粕共同処理などはじめる。(42年水協法により改組)

１９５９年 (昭和34年)	㊥国沢氏が、かつお節真空包装機を導入。
１９６０年 (昭和35年)	中間沖合漁場へ進出。集団操業漁船、山川港より出漁。（山川８隻、指宿２隻、岩本３隻、川尻４隻、石垣７隻）
１９６１年 (昭和36年)	サンドペーパーによるかつお節削り機導入。
１９６３年 (昭和38年)	番所鼻灯標完成。 山川のかつお漁船、遠洋15隻（平均 116トン）近海５隻（平均35トン）
１９６４年 (昭和39年)	第３次漁港修築はじまる。 成川浜埋立地第２期工事着工（40年完成） 番所鼻防砂堤完成。 かつお節産地入札即売会はじまる。
１９６５年 (昭和40年)	かつお節低温倉庫建設。
１９６６年 (昭和41年)	山川鰹節類加工協同組合、荒粕処理に圧さく乾燥機導入。
１９６８年 (昭和43年)	山川～根占間フェリー就航。
１９７０年 (昭和45年)	かつお節、小型パック製品の開発で需要伸びる。
１９７１年 (昭和46年)	カツオの頭切り機導入される。
１９７３年 (昭和48年)	種子屋久航路就航。 水中翼船就航。 第１次オイルショックで、燃油３倍に高騰。
１９７４年 (昭和50年)	第５次漁港修築事業（外港建設）はじまる。
１９７５年 (昭和50年)	さつま鰹節水産加工協同組合と山川鰹節類加工協同組合合併、山

	川水産加工業協同組合として発足。
１９７６年 (昭和51年)	水産物産地流通加工センター形成事業はじまる。 冷蔵庫（Ｆ級2,108トン） 漁市場搬送設備（フォークリフトほか）
１９７７年 (昭和52年)	漁具倉庫が完成。 200カイリ時代到来。 かつお漁業経営、次第に悪化。
１９７８年 (昭和53年)	節類共同削り工場完成。 外港埋立工事に着手。 第２次オイルショック、漁業用燃油価格高騰
１９７９年 (昭和54年)	残さい処理施設が完成。
１９８０年 (昭和55年)	水産物産地流通加工センター補足整備事業はじまる。 トラックスケール（40トン１基） 冷凍冷蔵施設（56年完成）
１９８１年 (昭和56年)	山川のかつお漁船、遠洋６隻（平均 364トン）近海３隻（平均72トン）
１９８２年 (昭和57年)	第７次漁港修築事業。 内港防波堤工事はじまる。 第25和歌丸、低温活餌装置を導入。 カツオ水揚、焼津に集中。
１９８３年 (昭和58年)	山川港まつり第50回を迎える。

編　集　後　記

「山川の文化財」も第５集になった。

今回の第５集は，年表形式による「山川の水産史」である。資料収集にあたっては，山川町水産商工課の御協力を得た。記して謝意をあらわしたい。年表としては，まだまだ不十分であるが町民各位の御活用をお願いする。

山川町教育委員会